

特集：尿検査をどう診るか？

【巻頭言】

岡田 要 (かなめ小児科・内科クリニック)
玉置 俊 晃 (徳島大学医学部薬理学講座)

はじめに

慢性腎不全患者の生命予後は、血液浄化療法や腎移植の進歩により著しく改善した。しかし、進行性の腎疾患に対する有効な治療法は確立されてなく、慢性透析患者の数は、増加し続け今や20万人に達し、大きな社会的問題になっている。

尿検査は、侵襲性がなく腎・尿路系に関する情報が多く得られ、非常に有用である。このため学校検診・各種健康診断・成人病検診・人間ドッグ等のスクリーニング検査として、尿検査が普及している。尿検査から得られた情報が、国民の健康管理に実際に有効に利用されるためには、幾つかの問題点があげられる。適切に尿検査が行われているのか？ どの様な尿所見を、異常として取り扱うのか？ 尿検査異常患者の検査・管理をどの様に行っていくのか？ どの様な尿検査異常があれば専門医に紹介すべきなのか？ これらの点に関しては、かなり標準化されてきたが、腎疾患の診療向上には統一した基準が必要であろう。

徳島県では、小児科医会、徳島大学医学部小児科腎グループ、県医師会との協議により“学校腎臓検診の精密検査実施ガイドライン”が作

成されて、検尿異常児の適切な事後措置に活用されてきた。全国集計からは、学校検尿を受けた世代の新規透析導入患者の数が減少していると報告され、腎臓病の早期発見・早期治療における尿検査の有用性が評価されている。平成11年に、最近の小児腎疾患診療の進歩を踏まえて、より簡便な検尿異常児の診断・管理の手引き書として“学校腎臓検診のガイドライン”が作成された。これを機会に、“学校腎臓検診のガイドライン”の内容を、徳島医学会会員のどなたにも解りやすく解説していただき、運用上の注意点・問題点を説明していただくことにした。さらに、手軽に又簡単に行える尿検査をより有益なものとするために、尿の取り扱いから尿検査の異常が見つかった場合の適切な取り扱いについて、臨床検査・小児科・内科・泌尿器科の専門家の意見をうかがうことにした。

徳島医学会会員の皆様が正しい尿検査により、腎・尿路疾患を早期に発見し、適切な解釈に基づき早期診断・早期治療と事後管理が行えることを願って、“尿検査をどう診るか？”を企画した。